

滋賀県湖西地域における湧水による伝統的集落の空間構成に関する研究
—滋賀県高島市新旭町針江地区を事例として—

代表 石川 慎治（滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 助教）

委員 濱崎 一志（滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 教授）

【研究報告要旨】

本研究は、滋賀県高島市新旭町針江地区をケーススタディとして、「カバタ（川端）」や「モノケ（物置）」といった湧水に関係の深い付属屋や、「カバタ」を繋ぐ集落内の水路網に着目し、湧水を利用する滋賀県湖西地域の伝統的集落の住空間の特性を明らかにすることを目的とした。

まず、針江地区の集落部分を対象に、各構成要素（建物、樹木、庭、畑、田、境界物など）を書き込んで作成した現状の集落平面図を、明治期の絵図と考えられている「高島郡針江村地籍全図」と比較しながら、針江地区の集落構造とその変化について調査した。水路の埋め立てや道路の消失などが一部あったものの、現在の針江地区の骨格は条里制の骨格をとどめていた明治期とそれほど大きくは変化していないことが明らかになった。

その上で、このような伝統的集落である針江地区において、湧水を利用した洗い場である「カバタ」や米を貯蔵するための高床小屋である「モノケ」についての実態調査を行った。「カバタ」は88棟ほど現存し、主屋内に洗い場が取り込まれている「内カバタ」、主屋と独立した洗い場となっている「外カバタ」というタイプの「カバタ」がほぼ同数存在することが明らかになった。また、「モノケ」は32棟ほど現存し、「独立型」、「複合型」の2タイプを明らかにした。

この結果をもとに、針江地区の主要な水系ごとに分析を行ったところ、現在の針江地区は水路と集落空間との関係から3つの集落空間に分けることができた。そのうち、水系が集落空間の中心を流れるところでは「外カバタが多い」、水系が集落境界の役割を果たしている2つの空間では、それぞれ、「内カバタ・外カバタが混在」、「内カバタが多い」ことが分かり、それぞれに異なる空間構成をもった住環境が針江地区の集落を構成していることが明らかとなった。